

十に分け、儒者を最下の十番目に置き、その上の九番目に乞食が置かれてある。これは傳へらるゝ通りに鄭所南の書いたまゝのものと致しましても、著者その人がひどく時世に憤慨した人のことでありますから必ずしもこの通りであつたとは信じかねる次第ではあるが、兎に角この時代には單なる儒者の如きは、別に尊重されたものとは考へる事は出来ないであります。

それでは元の朝廷が外の朝廷と異つて斯ういふ態度を執つたのは何故であるか、外の朝廷ではみんな支那文明に同化することになつたのに、同じ北方民族でありながら元の朝廷だけはさうでなかつたのは何故であるか、斯かる例外は何故に起つたかといふことについて考へてみなければならぬ。今こゝにこの現象を以て例外と申しましたが、例外といふことは同じ事情の下に違つた結果の起つて來たのを指すべきである。さう考へれば元の朝廷が支那文明に對して外の朝廷と變つた態度を執つたのは實は例外といふべきではないのであつて、違つた事情の下に違つた結果が起つて來たに過ぎないと見るのが適當であらうと思ふ。それではその異つて居つた事情といふのは何であるかといふと、先づ第一に元は支那に君臨する前に、滿洲であるとか、遼東であるとかいふ所から起つて、僅かに支那文明の一端を知つて居るに過ぎなかつた所の他の朝廷とは異つて、廣く世界各地の優秀なる文明に接觸して各其の特徴を知つて居つたのであつて、通俗な言葉を用ゐれば頗る世間が廣かつたのであつて、他の諸朝の田舎ものたるのとは大に趣を殊にして居つたのである。

八